

社会連携プログラムレポート

medi@ction

メディアアクション



後援：内閣府 / 経済産業省 / 農林水産省 / 観光庁
(公社)日本観光振興協会
新創刊部門「優秀賞」

VOL.03

2022

第3号



目白大学メディア学部

Mejiro University Faculty of Media Studies

INDEX

「責任ある担い手」になること。オンラインだからこそできることとは4

コロナ渦での社会連携で学生に求めたもの.....6

オンラインである故に利点と悩み.....8

オンラインで新たなつながりを 10

逆境を超えた先にあるものは..... 12

アクティブな対面ゼミをもう一度..... 14

イベントの楽しさを伝えよう！ 16

2021 年発足！勝野ゼミ 18

失敗の中から学ぶこと 20

作品からコミュニケーションを 22

コロナ禍だからできるプログラム..... 24

チームワークで良い作品を 26

オンライン化で制限される映像制作、今後対面との両立は可能なのか..... 28

社会の変化に対応するということ 30

遠隔でも対面でも同様に..... 32

実践的を追い求め、新たな挑戦を行っていく 34

メディアでアクション MEDIACTION

MEDIACTION は目白大学メディア学部の「社会連携プログラム」の愛称です。

メディア学部の学びの大きな特徴となっているのがこの「社会連携プログラム」で、2 年次から全員がこのプログラムに参加します。 メディア基礎演習 (2 年次) では、企画の立て方や調査手法、イベント実施のシミュレーションなど活動を行う上で必要となる知識・技術を習得。メディア実践演習 (3・4 年次) では、自治体や地域団体・企業など、学外のさまざまな組織と連携しながら活動します。さらに、インターンシップ (2~3 年次) で就業体験を行い、卒業後のイメージを明確にしていきます。*

メディアを学ぶ。社会とつながる。

現代社会におけるメディアの役割をより幅広く学べるように、テレビ、広告、新聞、雑誌、アニメなど従来のメディアに加えて、イベント、動画配信、AR(拡張現実)・VR(仮想現実)、ウェブデザインなど近年、注目を集めている領域に対応した科目を設置しています。

来るべきメディア社会を構想し、人間の生活にメディアを役立てていくことを目指しており、理論と実践をバランスよく学ぶことを理念としています。常に何をするためのメディアなのか、メディアを利用する目的は何か、いかなる社会貢献、変化を達成しようとしているのかを考えながら社会とつながり、メディアで社会的アクションを起こしていき、よりよい社会をつくることを目指しています。

教室を飛び出し、メディアの力で社会に貢献

本冊子に掲載されているのは、そのさまざまな事例です。一読していただければ、各クラスが具体的にいかなる MEDIACTION を実践しているか理解していただけるでしょう。各記事には、参加した学生のコメン

※「クラス」というのは 10 人前後のゼミ形式の授業で、メディア学部のメディア基礎演習やメディア実践演習は「クラス」という名で統一されています。メディア表現学科の「クラス」として行われた事例も掲載されていますが、混乱を避けるために担任の先生の名を冠して「何々クラス」と統一しました。

※ 2023 年 4 月からメディア学科では新カリキュラムがスタートし、「社会連携プログラム」は 3 年生からの開始となります。他にも変更がありますので、詳しくは学科ホームページを参照ください。

「責任ある担い手」になること。 オンラインだからこそこできることとは

牛山
クラス



▲ゼミ活動発表会の様子

Q 牛山ゼミの詳細について

映像制作、雑誌企画、広告コピーなど、皆さんがメディア学科で学ぶスキルを元に、実際の社会・地域をフィールドとして、自分たちの新しいメディアを企画し発信しよう！というのが、このゼミの大きな目的です。ゼミのモットーは「よく学びよく遊べ」。ゼミ活動は集中して真剣に、懇親会などは学生主導で行い、交流を深めます。

このゼミでは、担当教員の専門分野である地域メディア論・メディア・コミュニケーション論をベースとして、多様なメディアを活用した企画や問題解決の手法を学びます。そして、誰もが情報発信者になれる今だからこそ、「責任ある担い手」になることを目標とします。

ゼミは段階を踏んで、様々な地域や企業と連携し、プロジェクトベースで進めています。今年の2年生は、ゼミ活動を開始した9月からの1ヶ月間、さいたま市観光国際課と連携しました。3年生は、春学期に2つのプロジェクトを行いました。1つ目は、「JFNラジオCMコンテスト2021」ラジオに乗せて、学校アピールへの応募です。応募者数千人の中から、ゼミ生1名の作品が優秀賞に選ばれました。

社会・文化分野 牛山ゼミ

牛山佳菜代 教授

ました。2つ目は、福井県若狭物産協会との連携によるふるさと納税返礼品の企画提案です。現在は、これらの活動成果を生かし、西武新宿線の魅力を伝える冊子と動画の企画制作に取り組んでいます。

「オンラインでもできること」から「オンラインだからこそできることへ」がスローガンです。コロナウイルス感染拡大の前も、地域や企業との連携を行っていましたが、オンラインを活用することで、遠方の地域や企業とも繋がりがやすくなりました。今年度は、福井県の農業生産者や島根県の中学生、福岡県の企業経営者とのオンラインディスカッションを行うことができ、これまで以上に活動の幅が広がっていると思います。

Q 遠隔でのゼミ活動で苦労したこと

全員がオンラインを主とした活動が初めての中、当初は、対面で話せば数秒でわかることが、オンラインだと意思疎通に時間がかかったり誤解を招いたこともあるように思います。ですが、オンラインだからこそ、ゼミの時間以外に集まることができたり、教員と学生の面談も今まで以上に柔軟にできるようになりました。もちろん苦労はありますが、ポジティブに捉えることが必要だと思っています。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくのか

オンラインを活用することで活動の幅を広げつつ、対面でのリアル感も大事にしていきたいと考えています。

岩城正姫さん

①来年度、牛山先生が目白大学にご着任なされてから15年目を迎えます。牛山ゼミ15年目を祝して現在「15年プロジェクト」を進行中です。まだ構想段階ですが、ぜひ実現したいです。また3年時の秋プロジェクトとして、毎年冊子を発行しています。来年度は私たち14期生の番なので、全員一丸となって取り組んでいきたいです。

②活動量の多さが大変です。牛山ゼミの2年は週1回、2コマゼミを行っています。他のゼミと比較すると多いようですが、それでも活動時間が足らず、自主的にZoomで話し合ったり、Slackを活用して連絡を取り合ったりしています。活動量が多い分、普段の学業との両立は大変ですが、多くの経験を得ることができるのが魅力です。

③現在、島根県にある中学校の生徒に向けたインターネッティラシーを啓発するセミナーを企画しています。まずはそのプロジェクトの成功を目標に、これからの「責任ある担い手」になるため、ゼミ生一同活動していきます。来年度新しく入ってくる15期生の学生たちの手本になれるような、そんな活動ができればいいなと思います。

山下千晶さん

①学外活動を通じて経験を深めていきたいです。牛山ゼミでは、大学外の大人の方々と関わる機会がたくさんあります。しかし自分達でその場に足を運んで活動した経験が、まだ校外学習のみなので、現地の空気を感じることでできる活動がしたいです。3年の秋学期に始まる秋プロでできると思うので楽しみです。

②プレゼンです。私は人前で話すことがあまり得意ではないので、ゼミで毎回企画の進行状況の発表をするのは大変でした。しかし、何度も繰り返し練習することで段々と慣れていき、本番では失敗なく無事に終わることができました。力がいかに身についてきているのだと感じることができました。

③牛山ゼミの活動は、1つ1つの内容が濃く、活動を通じて身につく力がたくさんあると感じています。まだ1年も経っていませんが、それでも先輩方にも助けられながら、みんなで協力し成長できているのではないかと思います。今後、ますます本格的に活動できると思うので、ゼミを通して皆さんの経験と学びを身につけていきたいです。



▲Zoomでのインタビューの様子

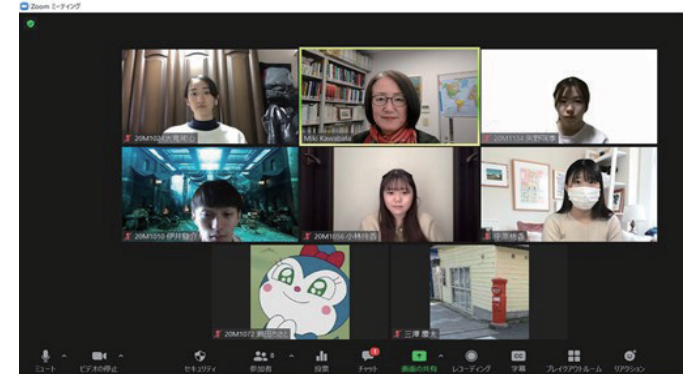
牛山ゼミ3年生 インタビュー

質問事項

- ① 今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ② 現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
- ③ ひとこと、意気込み

コロナ禍での社会連携で学生に求めたもの

川端
クラス



▶ゼミ活動中の様子

社会・文化分野 川端ゼミ

川端美樹 教授

Q ゼミ活動の詳細について

川端ゼミでは、社会連携活動として、現在（株）研ビット株式会社との連携を行っている。その主力商品であるリケンノンオイルドレッシングを若者に周知・販売促進するためのさまざまなプロジェクトを、2019年度秋学期から実施していた。これまでに、その成果を（株）研ビットのマーケティング部、商品開発部の方々に2回発表してきた。2022年1月にも2年生が発表会を行った。これまでに発表を行ったのは、ドレッシングや食生活の質問紙調査を基にした提言、大学で実際に学生にドレッシングを味わってもらった味覚調査を基にした提案、ドレッシングのパッケージデザインやテレビCMを競合他社と比較する内容分析を基にした提言、ショートフィルムを用いたCMや宣伝媒体についての提案などだ。企業の方からは、若者だからこそその視点で大変役に立った、是非参考にしたいなど、多くのポジティブなフィードバックを頂いており、さらに現在は2年生が新たなプロジェクトを3つ立ち上げ、学期末のプレゼンに向けて準備をしている。

Q コロナウイルスが蔓延する 前と後でのゼミ活動の変化

コロナウイルスが蔓延する前は、社会連携として東京都檜原村、千葉県の大喜町や熊本県熊本市・阿蘇市など、外部での調査活動を多く行っていた。コロナ後は、質問紙調査をインターネットで行う、プロジェクトの共同作業もZOOMで行うなど、工夫しながら活動している。また、コロナ禍で社会連携先企業への発表会もZOOMで行った。

Q 遠隔のゼミ活動で苦労したこと

ZOOMでのゼミの際、ビデオオンにしたい人がいれば、また電波状況などで資料の共有やビデオオンができない場合があった。対面であれば、このような問題は起こらないので、苦労した点だ。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくか

遠隔も悪い点ばかりでなく、便利な点もあった。コロナで社会連携先の企業を訪問できない時期に、発表会をZOOMで開催することができたことだ。今後は可能であれば対面を中心しつつ、移動が大変な外部の方とのやり取りや発表会など、場合によっては遠隔を取り入れながらゼミ活動を行っていきたいと考えている。

川端ゼミ3年生 インタビュー

学生への共通質問事項

- ①今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ②現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
- ③ひとこと、ゼミへの意気込み

伊井駿介さん ゼミ長

①今後のゼミ活動でやっていきたいことは沢山コミュニケーションを取ることです。自分は大学生になって人と話すことが増えたので、これから人と沢山話してコミュニケーション力を養って行きたいと思っています。そして、このゼミ活動を通して就活に使っていければいいと思います。

②今回のゼミ活動で大変だと感じたことは人から話を引き出すということです。自分はゼミ長をやっているのですが、ゼミの話し合いの時にみんなから意見を引き出すのが非常に大変だと思いました。春学期のゼミではもっと話を引き出せるように頑張りたいと思います。

③これから、3年生になり就活が始まってきますが、このゼミでやってきたことを就活で発揮できればいいと思っています。

三澤慶太さん

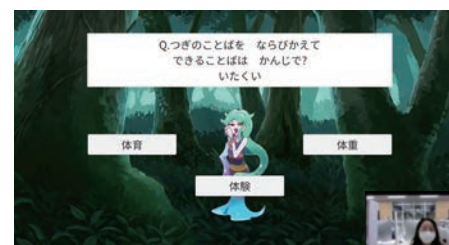
①現在は理研ビットミとの社会連携プロジェクトを中心として活動しているのですが、今後は活動の幅をさらに広げ、ゼミ生みんなが将来を見据えた上でやりたいことやゼミでできることを話し合い、みんなで協力して取り組んでいきたいと思っています。

②私たちのゼミではコロナ禍に配慮し、対面授業と遠隔授業を隔週でおこなったのですが、やはり対面でない話し合いや企画資料の作成がスムーズに進まなかったため、1年半でリモート授業にも慣れたとはいえ、その点は大変だなと感じました。

③私たち2年生は丁度コロナ禍と重なり、入学当初からあまり大学に登校する機会もないという、友達のできづらい環境下で大学生活を送ってきたので、ゼミが同じになったという深いつながりを大切に、互いに頼り、助け合っていきたいと思っています。

オンラインである故の利点と悩み

原
クラス



▲制作ゲームの画面



▲ゼミの様子

社会・文化分野 原ゼミ

原克彦 教授

Q ゼミ活動の詳細について

2年生は毎年パワーポイントやスクラッチを使ってゲームを作って勉強している。最後に作ったのは、パワーポイントを用いてモグラ叩きの仕組みを作るという活動である。企業に勤めると利用するPOC(ポック※)というように大まかな仕組みを、どのようにして作るかをパワーポイントを通して学んでいる。(※概念実証という意味でのProof of Conceptの略)

3年生はトレードフェアに参加するという大きな狙いがあった。参加する団体の多くは大学だが、小学校から大学までそれぞれ幅広い多くの団体が参加し、自分たちの開発した商品やサービスをプレゼンして評価しあう展示会へ毎年参加している。主に教育に関する新たなサービスを開発して、過去には8回か9回程入賞してきた。今年はリモート参加ということもあり、あまりうまく伝えられないことで入賞は叶わなかったが、ゲームを通して問題を解いていく教育用ゲームソフトを開発してプレゼンをした。また、4年生は個人制作を頑張っている。

Q コロナウイルスが蔓延する

前と後でのゼミ活動の変化

大きな変化はない。作品やネット上でのサービス制作がもともと多いゼミで、不便することはこれといってなかった。グループを作って話し合う場面にも、ZOOMの機能がかわって便利になる。ただ、皆で食事をしたり遠出したりすることができず、親睦が深まらなくて寂しい点が挙げられる。今の卒業生は可哀想だと思う。活動そのものは何も支障なく上手に行えている。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくか

コロナの対応というのは本当に難しいですね。治ってきたと思ったらまた広がるのでね。柔軟に対応していかなくてはいけないと思いますが、幸い原ゼミはネットを使ったコンテンツ制作を行っているので活動には不自由は感じていません。しかし対面の方が安心して活動が行えるのもあって、状況を見て安全な環境が整ったら対面の活動へ戻す予定でいます。

原ゼミ3年生 インタビュー

学生への共通質問事項

- ① 今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ② 現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
- ③ ひとつ、ゼミへの意気込み

檜山真由莉さん

① 今後のゼミ活動に期待することは、対面で活動を行うことです。原ゼミは一度も対面で実施することがないので、一度は対面で行ってみたいですね。挑戦したいことは、より良い学習ゲーム制作です。以前、学習ゲームを制作した際、まずまずの結果で終わってしまいました。なので、以前よりも進化した学習ゲームを制作したいです。

② 意思疎通や報連相(ほうれんそう)です。原ゼミ3年のメンバーは、基本的にLINEを活用して連絡を行っています。現在は改善されましたが、ゼミが始動して間もない頃は意思疎通や報連相が上手くできないことが度々ありました。メンバー同士で互いの距離感を図りかねていて、気軽に連絡をすることが難しかったのだと思います。

小野塚周平さん

③ 今後の目標は、先ほども挙げましたが「より良い学習ゲームの制作」です。現在、私達は新しい学習ゲームの制作に取り掛かっています。以前に制作したゲームのノウハウ、いただいた評価や意見を活かして、企画や制作準備をしている段階です。来年の春学期中の完成を目指して、原ゼミ3年一同で頑張っています。

① 今までは個人でのパワポを使ったゲーム制作が多かったのですが、これからはゼミ全体で何か一つのものを作成や、実際にゼミで作成しようとしているゲームに関連したものを遊ぶなど、交流を深める機会が生まれて欲しいと感じています。

② これまで一度も対面でゼミ活動を行ったことがなく、2年のゼミが終わってしまったため、ゼミに所属している人たちとまだ直接会って話したことがありません。そのため、普段での話し合いも相手がどう考えを持っているかなどを深く聞き出すことができず、遠慮をしてしまう場面が多くあります。人間関係の壁を非常に感じたゼミ活動でした。

③ 今後は、3年の後期にあるトレードフェア



▲ゼミ生が制作した学習ゲーム

に向け本格的にゲーム制作が始まります。今までに作成してきたものの集大成となると思うので、2年のゼミ活動でも話を進めながら行ってきたものを形にし、トレードフェアで賞を受賞することも目標にしながら楽しく活動を行っていききたいです。

オンラインで新たなつながりを

溝尻 クラス



▶ゼミ活動中の様子

社会・文化分野 溝尻ゼミ

溝尻 典洋 准教授

Q 溝尻ゼミの詳細について

2年生は外部の企業と連携し、『推しとコロナ禍とわたし』というテーマを掲げてラジオ作品を制作している。自分たちの推し（アイドル、声優、俳優、キャラクター等）を1つ決めて、コロナ禍に見舞われた1年半の間で推しとの関わり方がどう変化したのかを、学生2人1組で話し合いながら制作を進めている。

3年生は雑誌制作を行っている。日帰り・低予算で楽しめる大学生向けの秩父の観光ルート案内をテーマとして掲げている。

3年生の活動内容に関しては、学生たちに何がやりたいのかをゼロから話し合いながら決定している。

Q コロナウイルスが蔓延する前と後でのゼミ活動の変化

コロナウイルスが蔓延する前は、同人誌即売会などで、不特定多数に向けて制作物の頒布を行っていた。しかし、コロナ禍の影響で同人誌即売会やイベントが軒並み中止となってしまい、せっかく作った制作物の頒布場所がなくなってしまった。

その代わり、メディアを学ぶ他大学の学生と、

Zoomを使った合同発表会を開催して、各々作品を発表した。

Q 遠隔でのゼミ活動で苦労したこと

学生が一番苦労していた。現在の3年生が初めて全員で顔を合わせたのが今年の6月で、約1年間、対面で会うことができなかった。Zoomでゼミを開くことしかできず、人間関係が築きにくかったと思う。うまく築けていたとしても時間がかり、ゼミ内でお互いのことを知るまでに長い時間がかかった。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくのか

基本対面で活動する。しかし、コロナ禍のときに、オフラインのイベントの中止になり、発表の場がなくなってしまったときに、Zoomといったメディアを使った新たな発表の形が見えてきた。コロナ禍中に開いた発表会では大阪や広島の大学も参加し、80人ほどが集まって意見交換をした。リアルでは参加しにくい遠くにいる人々とも、Zoomだと一緒に活動することができる点がオンラインのメリットであるため、今後はそういった発表の場を利用していきたい。

溝尻ゼミ3年生 インタビュー

学生への共通質問事項

- ① 今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ② 現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
- ③ ひとつ、ゼミへの意気込み

西岡優佳さん

①ゼミ生たちとのグループワークなど、協力してできる活動を楽しみにしています。特に制作物や何か形に残るものをみんなで作れることを期待しています。

②一つのものを作り上げるのには、様々な工程・努力を経て完成へ繋がるということを現在強く感じています。個々が作業を終えたとしても、全員の制作物が出来上がり揃って初めてきちんと完成と言えると思うので、一人の協力も欠けてはいけなさと実感しています。そういう意味では連携が疎かになると余計に大変だと感じる人が多いです。

③ゼミ活動は始まったばかりですが、いま現在様々なことに挑戦させていたいただいています。この機会をうまくチャンスに出来るように日々努力していきたいと思います。以前同ゼミの先

輩と直接会う機会があったので、縦の連携も上手く取っていききたいです。

藤嶋美咲さん

①活動する中で信頼のできる人と行動を共にしていきたいので、お互いが言いたいことを言えるような環境になることを期待します。ただし、相手を傷つけないことを条件に言いたいことを言い合えるような仲になれたら良いと思っています。

また、上記を踏まえた上で何か多くの人の印象に残るような作品をつくれたら良いなと思っています。

②コミュニケーションの取り方がわからないので、作品づくりよりも大変だと感じています。自分は人見知りなので、ほとんどのゼミ生としつかり話したことがありません。また、自分の意見を述べるとき言い方が厳しくなっている気がするの、相手にとっては威圧的に感じているのではないかと思います。今後の活動のためにも、もう少し友好的な話し方ができるように努力していきたいと思っています。

③作品づくりにおいて、こだわられる所はこだわっていききたいと思います。妥協の多くなる作品より細かい箇所にも意識を向けられるように活動していきたいです。



◀ラジオを収録している様子

逆境を越えた先にあるものは

吉田
クラス



▲吉田先生

社会・文化分野 吉田ゼミ

吉田 則昭 准教授

Q 吉田ゼミの詳細について

2年生のゼミ活動は決められた形はなく、ゼミ生がゼミの活動内容を考えていく。

火曜日に週1回のゼミだが、週1のゼミ活動を補う形で水曜日の昼休みにも集合している。水曜日はゼミ活動においての相談ごとを話し、今週自分が行ってきたことをプレゼンする機会を設けている。

相談ごととは、これからのゼミ活動の内容について話し合っているだけではなく、ゼミ活動や授業に関することなどの悩みや不安を打ち明ける場である。今後2年ゼミ生に限らず、社会連携活動などに積極的に参加して欲しいと思う。

3年生からは、2年次の活動を継続しつつ、並行で社会連携活動を行う。

Q コロナウイルスが蔓延する前と後でのゼミ活動の変化

コロナウイルスが流行する前は、街歩きなどの課外活動を行っていた。

これまで行ってきた街歩きの1つに、渋谷のハロウィンに参加し、研究テーマを掲げ分析をした。こういった課外活動が、コロナウイルスの影響によ

て不可能になってしまったためオンラインのみの活動に狭まってしまった。

Q 遠隔でのゼミ活動で苦労したこと

全面遠隔授業に切り替わった際に、パソコン機器の操作や授業方式の変化などにおいて、生徒だけではなく、先生方もとても苦労しただろう。

ゼミ活動で苦労した点は、課外活動などを行うことができなかったことだ。

吉田ゼミの活動は、ゼミ生でテーマを決め、活動を行っていく。遠隔でのゼミ活動であったため、外出する活動ができなかったのが残念であった。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくのか

小説家、川端康成の名作「雪国」でこのような一文がある。

「トンネルを抜けるとそこは雪国であった。」

コロナトンネルを抜けると、ニューノーマルという別世界が広がっているのだろうか。

私たちの日常は、ここ2年程で大きく変わってしまった。コロナウイルスが終息したとしても、人々の意識と日常は元の状態に戻ることはない。コロナウイルスが流行したことによって、今までの日常の在り方が大きく変化した。

今後、ゼミ活動で遠隔と対面をどう両立していくのかということだが、これは遠隔と対面の両方の良い点を、両方活かしていこうと考えている。対面と

遠隔のどちらかに割り切れることはできない。そのため、今後は完全対面にはせず、遠隔と対面の両方の良い点を利用していききたい。

吉田ゼミ3年生 インタビュー

学生への共通質問事項

①今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)

②現在のゼミ活動で大変だと感じたこと

③ひとこと、ゼミへの意気込み

中村 理子さん

①現在は個人研究を終え、次に街歩きを計画しています。

これから社会連携プログラムを含め新しいことに挑戦していきたいと考えており、ゼミ論集をより良いものにするを前提として、動画作成やその他成果物を制作できることを期待しています。

②現在ゼミは昼休みに時々集まる以外基本的にリモートでの活動になっており、お互いのコミュニケーションなどが取れていないことが課題ではないかと感じています。また、個人研究とテキスト輪読の並行は初めての経験だったため、ゼミ生

それぞれ苦労したと思います。

③これからもっとお互いゼミ生メンバーのことを知り、それぞれの得意分野を発揮して補い合って頑張っていきたいです。

小野田桃佳さん

①実際に自分達で赴き、その地ならではの歴史や文化を肌で感じるという活動が今後あるのですが、行き先は決まっていなかったため、どこになったとしても楽しみながら学ぶことが出来たら良いなと考えています。

②個人研究として自分が好きなものを発表し、1000字程度にまとめることが活動してきた中では大変だと思いました。魅力が伝わるような発表をするためにPowerPointで資料を作るのは楽しかったのですが、文章を考えるのが苦手なため大変だという感情の方が大きかったです。

③ゼミの皆や先生と対面で会うことができたため、これから活動していく中で仲良くなれるように頑張っていきたいです。



◀ゼミでの散歩の様子



◀アドミュージアム東京見学

アクティブな対面ゼミをもう一度。



▲石川ゼミの皆さん

石川
クラス



メディア産業・消費分野 石川ゼミ

石川 透 准教授

Q 石川ゼミの詳細について

二年生のゼミ活動は秋学期から始まった。まず最初にゼミ生たちにはたくさんの方の広告に触れて、学んで欲しいと思った。なので過去から現在までのテレビCMに解説を交えながら見返したり、アドミュージアム東京を見学し実物の広告を見ることが、広告の面白さを体感してもらった。他にもゼミ生たちでキャッチコピーを試行錯誤して考え、発表したりした。そこで考えたキャッチコピーを元にポスター案を作ったりした。ゼミでは言葉でメッセージを作り、それをどんなビジュアルで見せていくかという基本的なところから体験してもらった。そして現在、二年生はACジャパンの広告学生賞に向けて作品を制作しています。

Q コロナウイルスが蔓延する前と後でのゼミ活動の変化

コロナウイルスが蔓延してからはZoomでのゼミ活動に切り替わり、ゼミ生たちが話し合っているところに先生が参加する形でゼミを進行していた。先生と学生がコミュニケーションを取りながら作業

を進めていくという点においてはさほど大きな変化はなかった。ただ、リモートならではの弊害もあった。Q 遠隔でのゼミ活動で苦労したこと

リモートでのゼミ活動は難しいことも多かった。対面だと盛り上がる話し合いも、リモートだと会話が噛み合わなかったりした。やはり遠隔と対面では相手から受け取れる情報量（表情や声の抑揚など）が違いため、コミュニケーションが上手くいかないことも多かった。

特にグループでアイデアを出してモノを作る活動においては、お互いが伝えんとしている微妙なニュアンスを汲み取っていく必要がある。そこを上手く汲み取ることができれば制作者側が本当に伝えたいことを表現できる。本音で話し合い、人の心に響くメッセージを作るため、今後でもできる限り対面でのゼミ活動を続けていきたい。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくか

昨年度はリモート、今年度は対面という形式でゼミ活動をしてきた。今後も対面でのゼミ活動を進めていきたい。学生からすると遠隔と対面をミックスして授業するのは移動の労力もかかり、大変だと思う。ただ、それでも対面のゼミ活動をすることで得られるコミュニケーションはゼミ内でのアクティブな創作活動に繋がる。

石川ゼミ3年生 インタビュー

- 学生への共通質問事項
- ① 今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
 - ② 現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
 - ③ ひとこと、ゼミへの意気込み

滝口丈瑠さん

- ① ACジャパンの広告学生賞に応募するなど、自分たちで広告を制作する機会が増えていくため、学生間の横のつながりを強めて制作していきたい。
- ② ACジャパンへ応募する広告作品は公共広告のテーマであるため、そのテーマを絞る作業に苦労している。
- ③ 1月に締切となるACジャパン広告学生賞へ応募するため、各グループができる限りのことを行い、少しでも良い成績を取れるようお互いに助け合っていきたい。

高原空良さん

- ① 様々な広告と触れ合う中でまだ自分の中で出会っていない価値観を育み、それをアウトプットできるように石川教授や他のゼミ生の方々と学べたら良いなと考えています。
- ② 今現在は二人一組で一つの広告を生み出すことをしているのですが、アイデアや切り口がなかなか思いつかないことや一度良いな、と思ったものでも翌日経って見返すとあれ？と思うことが多いです。特に、私は自分の世界観を言語化するのが難しく、他の人と共有するためには語彙力も求められるなあと感じます。
- ③ まだまだ未熟な自分ですが他人の心に残る広告を生み出していけるよう、また、広告の在り方を考えつつ今後とも頑張りたいと思います。

イベントの楽しさを届けよう！

岡星
クラス



▶ 岡星先生とゼミ生

産業・消費分野 岡星ゼミ

岡星 竜美 教授

Q 岡星ゼミの詳細について

2年生は秋学期後半からゼミ活動が始まりました。イベントは現場が命、五感で感じるとか、感動するとか、その場でないと得られないモノが大切。しかし、コロナの影響で全部オンラインになってしまった。そのため教える側も、ゼミを受ける側もゼミに期待していたことはなかなかできなかったのが、現実。

そんな中、オンラインで岡星ゼミでは何をやっていったかというと、イベントとは何かについて表面的な部分ではなく、イベントの本当の価値は何か、特性は何か、可能性は何かを教えることで、ゼミ生たちに「こんなこともイベントなんだ」と気づき、学ぶ活動をしていった。そして、いつしかゼミ生たちには、メディアやイベントに限らず、何かしらの形で世の中にインパクトを残していって欲しい。その大元をイベントから学んで欲しい。

3年生からはイベントについて深く知るために、イベント業界やイベントの仕事の中身についても学んでいく。

Q コロナウイルスが蔓延する前と後でのゼミ活動の変化

まずオンライン上で行えることと、できないことがある。知識や情報を伝えるだけならオンライン上でも十分できると感じた。当時は、ゼミの内容もオンラインでできることを選んでいた。しかし、どうしてもオンラインでは伝えられないものがある。ひとつは、細かいコミュニケーションが取れない。ゼミ生たちの体調や細かなニュアンスが分からなくなってしまう。これが普通のゼミであれば、先生とゼミ生たちで細かなコミュニケーションがとれる。もうひとつは、企画のワークショップをやる時は3人、4人で実際に集まって創発するのが大切なのだが、Zoomではそれも難しい。ダイナミックな会話ができない。総じて、オンラインの良い所と悪い所の両方を感じたゼミだった。

Q 遠隔でのゼミ活動で苦労したこと

先に挙げた、細かなコミュニケーションやダイナミックなアイデアの創発に苦労した。また、コロナ前のゼミでは、イベントに行くことが多かった。例えば、イベント会社のオフィスを覗いてみることで、ゼミ生たちにイベントの仕事に携わることへの夢や憧れを抱いてもらう活動もしていた。しかし、コロナウイルスが蔓延したことで、実際のイベントの現場に赴くことも難しくなってしまった。イベントは

現場を見ることがとても大切なため、その分苦労した。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくのか

コロナはゼミ活動に選択肢をもたせた、という意味では良かったと思う。去年のはじめまでは遠隔で授業ができるなんて思っていなかった。それまで、先生と学生がお互いに盛り上がりつつ、コミュニケーションを取るのが大学の講義だと思っていた。ただ、1年半から2年くらい遠隔で講義をしてみて、これもありだなと感じた。なぜなら、知識と情報を与える講義スタイルなら、遠隔もありだと感じたからだ。その他にも、何かしらの理由で休校になったとしても、オンラインなら授業ができる。このように状況に応じて、ゼミの形式を使い分けられるようになった。また、岡星ゼミではクラスターというバーチャルイベント空間に集まってゼミ活動をしたこともあった。なので、今後はゼミ活動も場所に囚われず行うことができる、とプラスの側面も知ることができた。

岡星ゼミ3年生 インタビュー

学生への共通質問事項

- ① 今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ② 現在のゼミ活動で大変だと感じたこと

③ ひとこと、ゼミへの意気込み

ゼミ長 橋本 和信さん

① イベントのゼミに入ったからには自分の可能性を広げていくために、現在自分が就きたいと考える職以外のところにも、多くのイベントに参加していきたいと考えています。

② 現在のゼミの学びでは、基礎となる部分しか学習をしていないため、まだゼミ活動で大変だと感じたことはありません。強いて言うのなら男子が一人しかいないため、馴染めないです。

③ 早くコロナウイルスが終息し、様々なイベントが再開したら沢山活動していきたいです。そして、イベントについて更に深く学んで行きたいと考えています。

吉田 日向さん

① コロナウイルスの影響で実際にイベント現場に足を踏み入れ、イベント等について学ぶ機会はまだまだ無いと考えています。そのため、3・4年のゼミ活動では実際に現場に足を運び何か経験したり、何か感じたりしたことを将来、十分に活かせるようになるまで、まずはたくさん知識を身につけたいです。

② 一言にイベントといってもどんな仕事にもイベントは付き物だと考えています。将来自

分がイベントにどう関わっていきたいのか、勉強すればするほど悩んでしまっています。

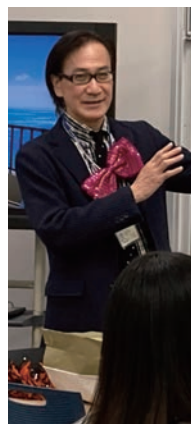
③ ゼミ生と積極的に意見交換をしつつ、先生からイベントの学びを多く吸収できるように頑張りたいです。

和田 実万さん

① 今後は実際に現場や企業に足を運び、イベントについて間近で体験し、学んでいけると思っているので、全体でイベントの原理を感じながら、様々なことを吸収していきたいです。

② ゼミの活動でまだ大変だと感じたことはありません。強いて言うのなら、コロナ禍でイベントとどのように向き合っているのか不安に思ったぐらいです。

③ イベントゼミということでこれから現場や企業に足を運ぶ機会が増え、コンサートやライブ、フェスなどの様々なイベントに触れると思います。現場を通して学んだイベントの楽しさや感動を、自身もしっかり伝えて「いける」企画を考えられたらいいと思っています。



▲熱心にゼミ生を教えている岡星先生

2021 年発足！勝野ゼミ

勝野
クラス



産業・消費分野 勝野ゼミ

勝野 正博 准教授

Q. 勝野先生がゼミで心掛けていること

ゼミ生が主体的に労働的にゼミを行うことです。高校の授業や講義などは先生がいて教わりますが、自分で考えて自分たちで徐々に全てに取り組み、いくことが重要だと思っています。卒業研究、制作するにしても個人プロジェクトなので、それに至るまでゼミというのはゼミ生が主役で私がアドバイザーという役割が理想だと考えています。メディアとは何かというのをよく考えて、それを活かせる基礎を身につけてもらえるように心掛けています。

Q. ゼミの活動内容

一つは、外部の方と協力してメディアの企画を作る演習に取り組んでいます。最近のメディア企画の動向を教えてもらった後は、自分たちで考えてみる。また、キャリアを考えるボードゲームをやったりもしています。二つ目は、個人の興味・関心を深掘りするために「気になる」という活動をしていて自分達が気になっているものをいくつか紹介してそれに関する質疑応答などをし、それを何回か繰り返して自分に興味あるものを見つけて、それに関わる演習を卒業研究などに繋げるなどの狙いがあります。グ

Q. ゼミの雰囲気

2年生のゼミを持っているだけなので何とも言えませんが、自分たちの好きにやっているみたいなので雰囲気は楽しいみたいです。笑。コロナの影響もありオンラインが長かったので現在は対面でできているのも一つの魅力で、講義もやろうと思ったのですがオンラインでできると言われそうなので全部やめて、今は全部演習にしてコロナの1年半の鬱憤を晴らして大学生っぽい雰囲気味わってもらっています。

Q. 勝野先生の趣味&好きな食べ物

趣味はメディアのことを考えること、家庭菜園などですかね。笑。具体的にはいちごや野菜などを作っていて一旦デジタルから離れて生活してみると本当に幸せですね。好きな食べ物は、魚が好きで昔は肉が好きでしたけどだんだん食べられなくなつて今は魚の方が好きです。歳をとるとこういうことはこういうことなのかなと思いましたね。笑。



▶ゼミ生の価値観を共有するバリューカードゲーム



勝野ゼミ3年生 インタビュー

学生への共通質問事項

- ①今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ②現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
- ③ひとこと、ゼミへの意気込み

日種健人さん

①ゼミで学んでいることは、企業のマーケティングや自分の気になることを調べたり、先生が言った本を読んできてそれに対する自分の感想を言ったり、外部の人と協力して商品のブランディングなどを学んでいます。

②先生の印象は、優しく思ったよりもフランクな感じで全体や個別で食事会などがあり親身に接してくれます。

③このゼミは今年始まったばかりなので特にやる事が決まっていらない人や、自分の気になることを追求する人におすすめのゼミです。

鎌倉彩由佳さん

①ゼミで学んでいることは、色々なジャンルのことを学んでいて具体的には自分のキャリアについて考える機会があり、商品のプロモーションを考える、ゼミ生自身が気になっていることをレポートにまとめるなどです。

②先生の印象は、定期的に1対1の面談があるので親身に接してくれます。また、ゼミ生が何か悩んでいると一緒に解決策を考えてくれるのでゼミ生のことをよく考えてくださっています。

③ゼミ生で日程などを決めるなど、自分たちの意見がよく通るゼミだと思います。決まった枠組みに縛られないので自由に活動したいと思う人や、ゼミで進める企画運営を毎回二人くらい選んで取り組むのですが、実際に取り組んでみて主体性や積極性が身についたと感じました。このような経験は社会に出てからも役に立つと思うので、こういう能力を身に付けたい人などにもおすすめです。



▶博報堂キャリア研のボードゲーム形式「キャリア研の人生はいつだって戦略と偶然」ワークショップ

失敗の中から学ぶこと

鷺谷
クラス



▶2・3年生合同ゼミの写真

Q 遠隔でのゼミ活動で苦労したこと

3年生は2年生の時からずっとリモートで行っていたので人間関係を作るのが大変だったように感じる。リモートでもやれることはやっていったつもりだった。私のゼミは「プロジェクトマネジメント」あるいは「プロデュース技法」をゼミの題目としてやっている。その1番の取っ掛かりは「チームビルディング」になる。つまり、顔を合わせた人同士が気軽にものを言える関係を作り、風通しをよくしプロジェクトに向かってみんなで進めるようにするということだ。リモートでのチームビルディングは手探りだったので非常に苦労した。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくか

企画の進行自体は遠隔でも問題はないが、仕事が終わる前後に顔合わせをして仲良くなる「打ち入り」や「打上げ」は対面でやるべきだと思っている。これから遠隔が続いたとしても、新しいことやバカだなと言われるようなことをやっていきたいと考えている。

そもそも100%成功するプロジェクトはない。その失敗こそが勉強だと思っている。こちらから失敗しないようにと先回りしてしまうと学生の経験にならないし、記憶にも残らない。遠隔と対面を両立

産業・消費分野 鷺谷ゼミ

鷺谷 正史 准教授

Q 鷺谷ゼミの活動実績について

21年度は4年生は卒論の制作を行っていたためずっとリモートで活動していた。3年生は初めは合宿や桐和祭の計画を立てたり、トキワ荘の「夢の虹」という地域連携のプロジェクト進めていた。しかし、夏休みにかけてコロナ感染者が増えたためリアルでやる計画は全て中止になってしまった。そのため3年生は卒論に向けWordを使うことに慣れるということに切り換えた。卒論のために覚えた方がいい機能を意外とみんな使っていなかったりするためそれを勉強した。例えばWordのスタイル機能やアウトライン機能を学んだ。Wordの訓練だとリモートでも対面でもどちらでもできるのでハイブリッドで行っていた。

秋学期からゼミが始まった2年生は初めの1ヶ月くらいはリモートで行っていた。その後は対面も交えながら活動した。秋にはトキワ荘のイベントに参加した。子どもたちに夢を書いてもらった小さい旗を繋げてトキワ荘公園の飾りつけをした。後半からはAR企画をやっている。「トキワ荘通りにARの鍵になるようなものを置き、スマホをかざすと何かが出てくるというアプリを開発中なので、どのよ

させなければならぬ。これからのゼミは新しい失敗、学びのチャンスだと捉えている。



▲「夢の虹」プロジェクトに参加

うなものが出てきたらおもしろいのかを考えてほしい」協議会の方からと依頼されて取り組んでいる。



▲トキワ荘フィールドワーク

Q コロナウイルスが蔓延する前と後でのゼミ活動の変化

もともとSlackやGoogleドライブ、Classroomなどのオンラインツールはずっと使っていて、対面では個々がやっていることのすり合わせなどのためにやり、活動はバラバラでも大丈夫というような形で実施していた。だからあまりコロナの影響を受けないだろうという思いでいたが、振り返ると活動内容のディテールなどの細かいところはリモートではしっかりと詰めることが難しかったなど感じている。

ゼミ生インタビュー

ゼミ所属の2・4年生にGoogleフォームにて回答していただいたものを抜粋。

①現在のゼミ活動で大変だったこと

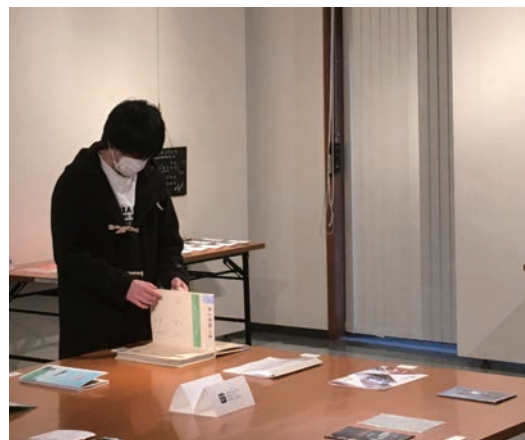
- ・プレゼンテーションの練習、外郎売りの暗唱、ARの企画立案。
- ・アイデアを出すのが大変です。

②今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)

- ・社会連携プログラム・就職の時に言えるような経験を積むこと。
- ・地域とのプログラムや、将来に役立つことをやりたいです。

③ひとこと、意気込み

- ・ゼミ活動はまだ始まったばかりなので、今後
- もゼミ活動で興味を広げていきたいです。
- ・様々な活動を通して、自分の好きなことを見つけていきたいです！



▲コンペの様子②

く説明できない部分を感じとれたりするから対面の方が良いかなって思っている。
遠隔には遠隔の良さがあるんだけど、安楽としてはすばっと全対面に戻って欲しい。

作品からコミュニケーションを



▲コンペの様子①

安楽
クラス



表現・技術分野

安楽ゼミ

安楽豊 教授

Q 安楽ゼミの詳細について

2年生はグラフィックデザインの基礎を学ぶために、Adobeのイラストレーターを使ってスキルアップドリルをやっている。例えば何かのシンボルマークだったり、ロゴマークをトレースしたりとペンツールでなんでも思い通り描けるようになるというところを目指している。

3年生は自治体やイベントが主催しているコンペに参加をしてロゴマークの制作を行っている。また、フリーペーパーの制作も行っていて、それらの作品を安楽ゼミだけで学外のスペースを借りてゼミ展という感じで展示をしている。

しかし、それもコロナの影響で中止になってしまっている。

Q コロナウイルスが蔓延する前と後でのゼミ活動の変化

うちのゼミは制作して終わりという訳ではなく、作品を作って見せてその反応を見聞きして展覧会に来てくれた人や審査員とコミュニケーションを取るゼミだけど、できるだけ人に見せびらかしているという感じでスタートする。だから、そのゼミ

展がないっていうのが本当に辛くてどう葉っぱをかくてあげるか、どうモチベーションを上げるかというところがグレーのままでこの2年間やっている。そんなマイナスの気持ちがある反面、対面でゼミをやっていた頃は中々声がかけれなかったり、時間のことを配慮する子がいなかった、zoomだと画面共有をして、こうすれば良いよと教えればステップアップした状態で課題が返ってくる。それはコロナのおかげといえればおかげで、発見につながった。

Q 遠隔のゼミ活動で苦労したこと

去年1年間は学生の様子が全く分からなかった。コロナ前は週1回でゼミに集まったりしてみんな元気かなとかこの子ちょっと眠そうだなとか、そういった情報ってたわいもないことかもしれないけど重要なことだと思う。LINEでゼミのグループを作ったりもしたが、中々既読にならなかったり、学生の生の様子を知らなかったのがちょっと苦労した点かな。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくのか

zoomの機能を使うと一人に教えていることがみんなに共有されるからそこは良いんだけど、やっぱり一対一でしっかり話を聞いたり、アイデアスケッチ見せてもらったりと対面の方が雰囲気こんな方向性を持っていききたいのかなとか言葉で上手

安楽ゼミ3年生 インタビュー

学生への共通質問事項

- ① 今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ② 現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
- ③ ひとつ、ゼミへの意気込み

那口和揮さん

① 今後のゼミでは制作スキルを上げることがもちろんですが、どのように人や企業にグラフィックデザインを提供するのか、良いデザインとは何かも学んでいきたいです。

② 現在、安楽ゼミではグラフィックデザイン制作に使うIllustratorのスキルアップを目指したドリルに取り組んでいます。毎週のゼミで一人一人のドリルをチェック、評価していただきアドバイスをいただきます。そのドリルでは徐々に制作難易度が上がっていくので大変ですが自分のスキルが上がっていることを実感できるので楽しいです。また、ゼミ生とのコミュニケーションも大切にしており、個人指導や質問など簡単にできる環境を作ってくださっているので、安心して課題に取り組みます。

沖本真澄さん

① Illustratorの技術向上・デザインやアートの知識・テーマの沿った制作。

② 大変だと感じた出来事はまだありません。今はIllustratorへの理解を深める段階であり、どんな知識も嬉々として取り入れた方が良く考えているからです。

③ 正円トレースの課題の講評の際、「怖いくらい合ってる」と評価して頂いたのが嬉しかったので、俄然やる気が出ました。頑張ります。このゼミは個人作業が多くなるとは思いますが、気軽に相談し合える空気感を作っていたら良いなと思っています。是非よろしくお願いします。

コロナ禍だからできるプログラム

遠西
クラス



▲ VR 体験の様子

表現・技術分野

遠西 学 専任講師

Q 遠西ゼミの詳細について

2年生はプログラムの勉強をし、Unityというゲームエンジンを使って2Dのゲームを作成することを目標にしている。3年生からはオープンキャンパス等に向けて、濃厚接触にならないミックスドリブリーティといったコンテンツを作る活動を行っている。4年生は卒業制作を行なっている。普段の授業で基礎的なプログラムを学んでいるので、ゼミではそれを応用したコンテンツを作ったりしている。いきなり作るのはできないので基礎的なことからしっかりと勉強していく。

Q コロナウイルスが蔓延する前後でのゼミ活動の変化

対面で活動していた時は何チームかに分かれて活動を行っていた。ゲームを作成するチーム、プログラムを作成するチーム、その他のチームで分け、それぞれ進捗を聞きながらゼミ活動を行っていた。遠隔だとzoomで一つの部屋に集まることにより順番に一人一人に進捗を聞くことになるの

で、時間が足りなくなってしまう。プログラムは自宅にあるコンピューターでも使用できるが、ゲーム作成ぐらいはできない。大学にはセンサーを使ったり、VRのゴーグルとかセットもあるが、それを使用するには大学に行かなくてはならない。大学に集団で行くことはできないので難しい。遠隔だとプログラムの勉強ばかりになってしまっているので、そこが変化してしまったところかなと感じる。

Q 遠隔でのゼミ活動で苦労したこと

コミュニケーションの取り方に苦労した。遠隔でも喋ったりできるが、注意した時に、対面で注意される場合は納得できたり話を理解できるが、遠隔だと画面越しなので、相手に伝わらないことが多い。うちのゼミはスバルタでやっているの、授業と同じ感覚でゼミを受けていてもプログラムはできるようにならないので、自分で考えたり議論したりして活動している。遠隔だとどう進捗を聞いたり焦らしたりしたらいいのかに苦労している。ゼミというものはコミュニケーションを使って活動していくものなので、そのコミュニケーションが遠隔によりばつりなくなってしまうことは悲しい。その状況で遠隔授業は学生と話をしても何も響かないなあと感じている。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくのか

基本的には対面を増やしていきたい。今後は各自でノートパソコンを購入していかねばいけないのかなあと思っている。学生の負担が増えてしまうのは心苦しいが、家でも大学でも研究を進められるような環境を作っていくことが大切だと思う。

遠西ゼミ3年生 インタビュー

- ① 今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ② 現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
- ③ ひとこと、ゼミへの意気込み

岡野光希さん

① プログラミング言語を使ってゲーム制作をすること。現在学んでいるJava ScriptやC#以外の新しい言語の習得、目標をもってコンテンツを制作する。

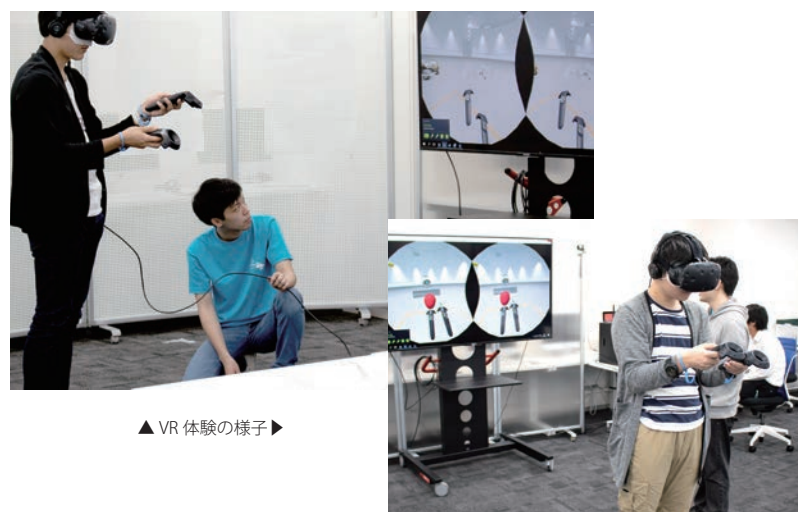
② わからないところはすぐに解決しなければ

杉本英駿さん

③ パソコンと仲良くします！

① 今後は、それぞれのゼミの特色を活かして、より専門的な技術や知識を取り入れながら活動していきたいです。また、発表会を通して、学内で活動が完結するのではなく、実際に社会と接点を持ちながら活動しているゼミもあることが分かったので、全体がより社会と接点を持った実践的な取り組みに向けて活動していければと思います。

② オンラインでPCを用いたゼミ活動が多かったのですが、授業を聞きながら同時にPC内で作業を行うゼミは非常に活動が難しかったように思いました。通信環境や見づらさ聞きづらさが原因で進捗がゼミ生全員で統一されていないと、後の先生方のフォローも大変だろうと感じるし、生徒としても不安や焦りが残るだろうと思います。対面で行うか、オンライ



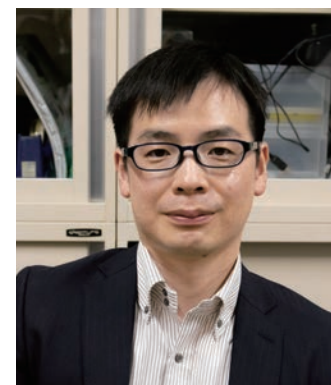
▲ VR 体験の様子▶

ン授業のように資料を後で配布するなどあらかじめ対策が用意されているといいなと思います。

③ ゼミ内やゼミ外での交流を忘れず、今後とも活動を頑張りたいです。

チームワークで良い作品を

西尾
クラス



▲西尾先生

表現・技術分野 西尾ゼミ

西尾 典洋 准教授

Q 西尾ゼミの詳細について

2年生はゼミに入ってから約2ヶ月しか経っていないので、現在3年生で制作する「めじTV」や、社会連携活動で作る作品の撮影、編集の基礎を学んでいる。

また、基礎を学んでいく上で、撮影に使用する本格的なビデオカメラにも触れて、学習している。

西尾ゼミでは、1人1本の動画を制作するのではなく、編集の分担を決めて行い、チームで活動するためコミュニケーションの取り方の練習も行っているといえる。

3年生は、「めじTV」の撮影を中心として取り組んでいて、現在は目白大学と包括連携協定を結んでいるさいたま市から動画の依頼を受け、CMやプロモーションビデオの制作を行っている。

Q コロナウイルスが蔓延する前と後でのゼミ活動の変化

コロナウイルスが蔓延する前は、大学のパソコンを使用し、ゼミ生同士はひとつの部屋で映像編集を行い、打ち合わせは対面で行っていた。

しかし、昨年度は対面での活動が出来なくなってしまうため、打ち合わせはZoomを利用し、映像編集も自宅にある個人のパソコンを使用して編集をしなければならぬ状況となってしまった。ほかに、感染症の拡大防止のために取材を断られてしまうことが多く、活動が少なくなった。



▲ゼミ風景

Q 遠隔でのゼミ活動で苦労したこと

大学にいれば映像のデータは大学のサーバーで映像編集できるが、自宅の映像編集ではデータをゼミ生が各自管理しなければならぬ状況だった。

チームで作業するための映像制作のソフトは全員が同じ映像データを所持し、同じフォルダ構成で管理していないと映像編集が出来ない。

そのため、一人がファイルを保存し忘れたり、管理場所を間違えると観られなくなってしまうことがある遠隔作業が始まった当初はこのような、データ管理で苦労した。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくのか

ケースバイケースで取り組んでいこうと考えている。対面であると話し合いもスムーズで細かい調整がしやすい反面、大学から自宅までが遠いゼミ生（通学時間が2時間の学生など）が通学だけで毎日多くの時間を費やしてしまう。映像作品の納品時期が近づくと、定時に終わることが難しくなるため、通学の時間をもつたない。

また、作業時間が多くなってしまう、睡眠時間も削られる。コロナ禍により、遠隔作業のノウハウが蓄積されていったため、今後も遠隔作業を適宜行い、対面との両立を図りたい。

半田 莉菜さん

①3年生で行われる番組制作や、ドローンを使用する本格的な活動が楽しみです。地域のPRビデオの制作では、街の魅力をたくさんの人に発信していけるような動画を制作していきたいです。

②カメラの操作方法、設定などカメラ関係の扱い方が難しいです。1年時に授業で写真を撮る力メラには触れていたけれど、動画を撮る力メラはそれよりも難しく、大変だと感じています。

③3年での活動では本格的な撮影、インタビューが始まります。しかし、分からないことや不明な点が多いから、今のうちにそれらを解消し、完璧にして、万全な状態で制作に取り組んでいきたいです。

三田 紅藍さん

①今後のゼミ活動では、ドローン操作を行えることが楽しみです。

また、他大学との交流を行う機会があるため、円滑なコミュニケーションを行っていき、番組制作会社にて本格的に映像制作に関しての体験が出来るので、たくさんのかことを吸収していきたいです。



▲ゼミ風景

②ゼミ活動で大変だと感じたことは、主にカメラの操作です。また、主な活動以外の準備や片付けも時間がかかり、大変な作業が多いので、スムーズに行えるように頑張っていきたいです。人間関係を築くことも重要だと考えているのですが、うまくコミュニケーションがとれないこともあり大変だと感じています。

③私の夢が動画を撮って編集をすることなので、自分だけの力で魅力溢れるオリジナルの動画を作ることを目標とし、頑張っていきたいです。

オンライン化で制限される映像制作、今後対面との両立は可能なのか。

馬場
クラス



▶映像制作企画会議を行うゼミの様子

表現・技術分野 馬場ゼミ

馬場 一幸 専任講師

Q 馬場ゼミの詳細について

手短に回答する際には「映像制作技術の修得を主眼としている」と説明しているが、「技術」という単語が多義的であり、またその「修得」が具体的にどういった状態であるのかを示すことは、それ自体が難問であるため、ひとまず個人の能力差は結果の差異を説明する必要性に迫られたときに適及的に導入されるものであるという認識から、所与の条件に幅を持たせた上で実制作に取り組んでいる。

Q コロナ蔓延によるゼミ活動の変化

前述したような意味での「能力」には、映像制作分野に特有の共同作業の作法や情報共有の流儀等も含まれると、かつて今も考えられており、一昨年来の伝染病の流行下にあつては当然、それらが前提としている物理的に近距離にある複数の他者と一定期間を共にする状況を設定して訓練を実施することが困難になっている。

Q 遠隔でのゼミ活動で苦勞したこと

前述した「訓練」は、環境変化に伴い必要性が消滅したのではなく、状況的に実施が困難であるとい

う由々しき事態ですが、本当に遺憾ながら、その方面は「今は不可能」と断念して、個人の手の内に着目することにしました。それは個々の需要に合致したものを提供するという見方も勿論できますが、この際、教員への負荷を無視するとして、どれほど丁寧であつても必要とされる要素の一部をやはり欠いているということには変わりありません。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくのか

前述のように、映像制作において本来必要だろうと思われる要素を欠く（少なくとも、世の中の映像制作一般が、物理的な空間に人々が集まって「現場」を成立させることを放棄しない限りは）ため、対面形式で実施していきたいと望んではいますが、企画の検討は遠隔、制作は集まって、という区切り方は一応できると思います。

馬場ゼミ3年生 インタビュー
学生への共通質問事項

- ①今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ②現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
- ③ひとこと、ゼミへの意気込み

水野一輝さん

① 今後のゼミに期待することはゼミ内の親睦をより深めることです。私たちが2年生の内はコロナウィルスの影響で中々ゼミ内の交流が出来なかったのですが、今年度はそれが嘘のように親睦を深められました。来年度からは4年生になり、卒業制作が始まるため、個人の活動が多くなると思います。しかし、せっかく出来たゼミ生同士の親睦なのでどうにかして交流し続けていきたいです。

② 現在のゼミ活動で大変だと感じたことはありません。しかし、対面での活動が制限されていた2年生の秋学期はまだオンラインでの活動が主なものでだったので、同じゼミ生でも初めましての方が多く、Zoomでの活動の際も

顔出しをしていなかったため人間関係の構築を良好にするまでが不安で大変と感じていました。

③ 私たちは初めこそ良い人間関係の構築に手こずってしまいましたが、今ではとても仲の良いゼミです。これからは個人の活動も多くなつていくと思いますが、ゼミ生同士で協力し合い、支えあつて活動が続けていきたいと思っています。

伊藤達希さん

① ゼミの仲間と何か一つの作品を制作したいです。3年生の後期にゼミの仲間と映像作品を制作したのですが、スケジュールがかなりかつかつになったり制作していく中で様々な改善点が見つかったものでそれらを踏まえてもう一度ゼミの仲間と作品を制作したいと思っています。とはいえ、もう4年生になってしまうので、卒業研究で複数人と何かを制作できたらいいなと思っています。

② とにかくオンラインでゼミを行わないといけない期間が大変でした。3年生後期の映像制作はコロナが少し落ち着き、ある程度オフラインで作業を行うことができたのですが、2年生



▲映像制作課題 試写会の様子

③ コロナの影響で3年生前期まではほとんどオンラインだったのですがゼミの仲間と話す機会がかなり限られていましたが、3年生後期の映像制作はオフラインで行うことができたので、かなり交流を深めることができました。ほぼ失ったと言つていい約1年間を残りの1年間で取り戻せたらいいなと思っています。

後期から3年生前期まではほとんどオンラインで行つていたので、コミュニケーションを取るのが本当に大変でした。オフラインだと皆話なのですがZoomになった途端話さなくなるので空気感もしどかったです。

社会の変化に対応すること

平山
クラス



▲ゼミ活動中の様子

表現・技術分野 平山ゼミ

平山秀昭 教授

Q 平山ゼミの詳細について

今の時代色々なゲームがある中で、そのほとんどがUnity(ユニティ)を通して作られている。ゼミではそのUnityというツールを紹介しながら、ゲームエンジンのプログラミングを学んでいる。デジタルな世界になった近年は、何においてもプログラミングが存在するが、ゲームを通してプログラミングを学ぶ意図はふたつある。若者が好むゲームが最も親しみやすいこと、プレイヤーと敵があたたらどんな動きをさせるか、流れを知って整理ができるからこそプログラミングのイメージを掴みやすいという理由だ。

またゲームプログラミングに限らず、3名程度でグループワークを行うなど、ゼミ生同士互いに意見を交換しながら学びを深めている。新宿区若者の集い『SDGs※バーチャルワールド』の制作などを通して、テーマに沿って協力しながらひとつの完成形を作ることで、ゼミ生の就職活動の備えにもなれば良いと考えている。

Q コロナ蔓延前後での活動の変化

去年の春は全てオンラインだったが、実際に行っ

て10人を相手にオンラインでゲームプログラミングを教えるのは無理だと思った。オンラインではマンツーマンで教えられないからである。誰か一人の問題解決のために画面共有を行うと、残りのゼミ生が取り残されてしまう。

それを去年の春に学んでから、秋以降はゲームプログラミングに関しての内容は基本対面で行ってきた。ゲームプログラミングはゼミの中心活動であり、直接的に教えることが良いと感じる場面があった。やはりオンラインは、1対1ではできても10人を相手には難しい。

そのために、体温計や機材を運ぶための台車の準備をはじめ、ゼミの前後に準備と片付けの時間を1時間ずつとって、感染予防に気を配りながら協力して行っている。また、コロナ前に比較して準備が大変になった反面、オンラインイベントの機会が増えた。ZOOMが普通になり、様々な機会へ顔を出すことができるようになったため、活動の幅が広がったと言えるだろう。

Q 今後遠隔と対面をどのように両立していくか

基本、ゼミの主な活動であるゲームプログラミングの作業は、対面で行う予定です。ゲームプログラミング以外の活動に関しては、オンラインで行うこともあります。ただそれでも、家でパソコンへ向かって話すのが恥ずかしかったり何かと研究室で行うのが楽なのか、学生はよく顔を出してくれます。

平山ゼミ3年生 インタビュー

学生への共通質問事項

- ①今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ②現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
- ③ひとこと、ゼミへの意気込み

金指康平さん

①今までUnity上でC#プログラミングの基礎から応用的なものをたくさん学んできたので、実践的なことを更に一層深くやっていき、自分主体で考え、答えを導き出し、工夫して何かを制作していけるような活動に期しています。

②全体的に対面の形でゼミの活動が行っていたので、さほどコロナの影響を平山ゼミが受けたような感じはないです。その中でも大変だと感じたことは、二人一組で一からゲームを制作している際に、どうしてもゲームに組み込みたい要素をどのようにして入れていけばいいかお互いに試行錯誤していたときだと感じています。

③卒業研究などのゼミの活動と並行して、自分の今後の進路について真剣に動いていかな

といけないので、大変な一年になると思うが、心をしっかりと切り替えてゼミの活動と個人的な活動に一生懸命励んでいきたいです。

佐藤亜美さん

①私たちは平山先生のもとゲーム制作についての基礎知識を学んできました。これからは、それらの知識を活かして卒業制作に取り組みます。自分の知識や資料の範囲内で制作するだけでなく、先生や他のゼミ生と交流できる場合も活用して応用的な技術も挑戦したいです。

②ゲームの制作過程について習っている中で、エラーが出たり、自分の思うような動作をしない場面がありました。その時にどこを間違えているのか、どうすれば解決するのかを考えて修正する作業が大変です。その時には、出来なかったところをどう解決した等の知識を他のゼミ生と共有しています。

③これからは卒業制作が主となってゼミの活動が行われます。就活と並走するような形になると思いますが、学生生活の集大成と言える作品を完成できるように地道に制作をしていきたいです。



▲平山先生

遠隔でも対面でも同様に

皆川
クラス



▲ゼミ活動の様子

表現・技術分野 皆川ゼミ

皆川武 准教授

Q 皆川ゼミの詳細について

web 技法という授業で web ページの言語の HTML と CSS を勉強して、それを前提としてゼミの中ではまずワードプレスという CMS (コンテンツマネジメントシステム) を使用してウェブ上で web を構築して行く。その中の Wordpress を利用して、ウェブサイトをそれで構築して行く方法から勉強していく。最初は CMS から Web サイトを学び、次に Web ページの言語のデータベースブリクトというプログラミング言語を勉強し、PHP やデータベースも扱っていく。

Q コロナウイルスが蔓延する前後でのゼミ活動の変化

ゼミの内容的には特に変化はないが、活動的には、大学のオープンキャンパスや地下のパソコン室の整備、また 2 等の対面で行うゼミ活動は制限されてしまった。

Q 遠隔でのゼミ活動で苦労したこと

遠隔だと生徒がどこまで進んでいるのか、できているのかできていないのか全くわからないことに苦労した。

労した。zoom 上で生徒に呼びかけても、反応が返ってこないことが悲しい。

Q 今後、遠隔と対面をどう両立していくのか

個人的には学習の効果が高いので、対面を中心にやっていくことが望ましい。基礎を勉強したり、学生同士がコミュニケーションをとる段階である 2 年生の場合は対面が必要である。4 年生のような基礎が身につく、あとは自分の制作物を作成していくような場合は遠隔で授業をおこない、進捗を聞くぐらいのスタイルの方がよい。段階的に遠隔と対面を両立していきたい。



▲皆川先生

皆川ゼミ 3 年生 インタビュー

学生への共通質問事項

- ① 今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ② 現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
- ③ ひとこと、ゼミへの意気込み

熊田 梨瑚さん

① 私は web 作成をする上で必要なたくさんのスキルをゼミ活動を通して習得し、立派な web サイトを作れるような人になりたいと思っています。

今は Wordpress という簡単に web サイトを作ることができる CMS を使ってサイト作りをしてきましたが、これからの活動では HTML や CSS、JavaScript、データベースなどを利用した Web 制作にも力を入れて行きたいです。

② 皆川ゼミの活動は主に個人作業が多く、一人で作業しています。作業中に自分では解決できないことが起こることが時々あります。そのような時は大変だと感じます。ですが、ゼミ生

や皆川先生にすぐ聞ける環境があるのでとても助けられています。

3 年次からは、Web で利用される JavaScript などのプログラミング言語の学習になるので本当の大変さはこれからのような気がします。

③ web 制作をする上で必要なスキルを身につけるために、難しいことにもたくさん挑戦していきたいです！そして、ゼミ生の仲間ももっともつと深めていきたいです！

林 里咲さん

① web サイト制作に興味を持ち、皆川ゼミを志望したため、今後は HTML や CSS、プログラミングなどの知識を今以上に増やしていきたい、見ている人が分かりやすいと思えるような web サイト制作を行っていきたいです。HTML、CSS を使用した web サイト制作は私自信複雑であると考えているため、苦戦する場面が出てくると思いますが目標に向かって努力していきたいです。

② 自分の視点だけではどうしても良いページを作れないことを、半年間のゼミ活動を通して学びました。その学びを活かしながら



▲ゼミ活動の様子

▲ロボット作成の様子

も、web ページを閲覧した人々がどのように感じるかを考えて web ページ制作を進めていくことが少し難しかったです。今後は、今以上に第三者の目線を大切にしながら制作を進めていこうと思います。

③ 今後はプログラミング言語の学習に入っていくため、今以上に壁に当たる機会が増えていくと思いますが、ゼミ生と支え合いながらよりよい web ページ制作を行ってきたいです。

実践的を追い求め、新たな挑戦を行う

三上
クラス



▶三上先生とゼミ生

社会・文化分野 三上ゼミ

三上 義一 教授



▲三上義一教授

Q ゼミの詳細について

実践的に行うことを意識しているため、具体的なプロジェクトに取りかかっている。現在は目白大学同窓会誌のリニューアルとその一環として、新しくスタートするブログを中心とした会報誌に記事や写真を提供している。同窓会は今後ウェブベースに変更したいと考えているため、会報誌をウェブベースにしていくことに協力し、そのウェブ解析などを実施できれば学生にとって良い経験と勉強になるはずだ。

Q コロナウイルスが蔓延する前と後でのゼミ活動の変化

つまるところオンラインか対面かの違いだろう。コロナが流行り始めてからは、当然、オンラインでの活動が多くなった。三上ゼミではフリーペーパーの制作を行っているため、コロナ禍で取材に行いにくくなったことには苦労した。去年は緊急事態宣言

が明けてからゼミ活動の一環として徐々に取材には出掛けたが、コロナの状況を慎重に見極めつつ、取材を進めなければならないというのは、ある種、網渡りのゼミを進めざるを得ない。

フリーペーパーだけでなく、三上ゼミは映像制作にもチャレンジしているが、2021年の暮れ一時的にコロナが沈静化した時期は取材ができるようになり、非常に助かった。

Q 遠隔のゼミ活動で苦労したこと

オンラインでの大変なところは、なかなかゼミ生全員がオンカメラしてくれないことかな。強制はしたくないので、コミュニケーションが取りにくい場合もある。顔の表情などが見えないため誰がどう思っているのかも伝わってこないもので、少し寂しい。ただ、声色や発言内容で微妙に学生の心情が分かるときもあるから、リモートも面白いといえる。

Q 遠隔と対面をどう活用していくか

今後ゲストを呼ぶとなれば遠隔の方が良いかもしれない。都合が付きやすいだろうし、わざわざ学校に来てもらう大変さが減る。それにリモートの方が画面共有している資料が見やすいのではないだろうか。

基本的に2022年度は対面にしたいと考えているが、果たしてどうなるかはまだまだ不透明。対面になればリモートを活用することは少なくなるだろうが、ゲストがリモート希望ならそのようにしていくかと思っている。

三上ゼミ3年生 インタビュー

学生への共通質問事項

- ①今後のゼミ活動に期待すること
(やっていきたいこと)
- ②現在のゼミ活動で大変だと感じたこと
- ③ひとこと、ゼミへの意気込み

青木優太さん

①今後コロナが落ち着くことがあれば学外でのインタビューを行い、それを記事や動画にし、発信していけたらと思います。三上ゼミでは学内の魅力や情報をどうしたら多くの人に知ってもらえるか検討しているため、その取り組みも上手くいったらいいなと思っています。

②ゼミ活動では掲載する内容の検討と決定、インタビューや文字起こし、レイアウト作成などを経験しました。この経験を通して、1から出版物を作る大変さを学びました。また三上ゼミでは一人ひとりが主体的に動き、期日までにタスクをこなす必要があります。周りのメンバーに迷惑をかけないよう、計画的に行動するのが大変でした。総じて、グループとして活動することの大変さと面白さを感じました。

③遠隔と対面の両方のゼミ活動を経験して、やはり対面でのゼミ活動の方が議論し合うこと

ができ、盛り上がりを感じました。ただ、遠隔でのゼミ活動も進行状況を伝えるのには適しているかと思いましたが、そこで遠隔と対面の両方の強みを活かした、ハイブリッドなゼミ活動が必要だと考えます。今後も三上ゼミの仲間たちと協力し合い、自身が引き受けた仕事を全うしていけるよう頑張ります。

高屋敷祐太さん

①今後のゼミ活動で期待することは、現在、記事作成や写真を撮るなどの作業を行っています。今後は自分たちでAdobeのソフトを使いこなし、より自分の理想に近い制作活動を行っていったら良いなと思います。

②同窓会広報誌と、「medi@action」3号と2つの媒体に記事作成を行っているので、大変になっていくと思いますが、ゼミ生と協力をし、お互いに高め合うことができているのでとても楽しく活動しています。

③意気込みは、記事を制作するにあたって読みやすい文章とは、読みたくなるような文章とはということを追求していきたいことです。一人でも多くの方に三上ゼミで制作したい記事を読んでいただくために精一杯努力していきたいと思っています！

【編集後記】

「夏休みは始まる前が一番楽しい」

私たちはこの「medi@action」3号の脱稿を終え、学生時代3度目の夏休みがやってきます。私達は入学当初からコロナウイルスによって多くの楽しみを奪われてきました。しかし、その中でも私たちは何かの区切りや、生活の中に「楽しみ」を見出して過ごしています。

期待することは悪いことはありません。どんな状況においても、期待することは生き甲斐の一つに過ぎないからです。例え、その楽しみが残念だったとしても、その楽しみで繋いできた生活があるからこそ、今の私たちはここに居られます。私たちはこの状況下を長い期間経て、物事の見方をあらゆる角度から見られるようになったと思います。そんな私たちの書いた記事が、多くの方の目に留まるのが今はとても楽しみです。

取材や原稿作成など本誌作成にあたり関わって下さった皆様に心より感謝申し上げます。

編集長 田上葉果奈

medi@ction



<https://www2.mejiro.ac.jp/project/media/>



https://www.mejiro.ac.jp/univ/course/f_media/d_media/info/20201101/

編集長：田上茉果奈 表紙デザイン：野沢 由奈

編集部：栗飯原千和、青木優太、石原百花、高屋敷祐太、棚澤未帆、津久井秀空、檜原菜摘
野沢由奈、横尾俊樹

2022 年 9 月創刊 第 1 刷